

自己調整力を育む特別活動

ー特別活動を核としたカリキュラム・マネジメントー

二宮 孝司¹⁾・佛圓 弘修²⁾

広島市立広瀬小学校¹⁾・広島都市学園大学 子ども教育学部²⁾

要 旨

本稿では、令和2年度から実施される学習指導要領の改訂を機に、児童の「自己調整力の育成」を目標とした「教育課程」の見直しを図るカリキュラム・マネジメントの過程と実践事例を報告する。事例として取り上げる広島市立広瀬小学校では、「社会に開かれた」とはということかを問いながら、「特別活動」を核にして、児童や地域の実態に即した「総合的な学習の時間」の見直しに着手している。また、学校経営の切り口として、「広瀬型コミュニティスクール」の発足と「教員の意識改革」を掲げ、両者を関連付けながら中堅教員（ミドルリーダー）の意識改革を図り、人材育成とカリキュラム・マネジメントによる教育効果を相乗的に底上げしてきている。

キーワード：特別活動，自己調整力，社会に開かれた教育課程，総合的な学習の時間

はじめに

現代社会を生き抜く子どもたちにとって、答えが一つではなく多様で想定外の事象に対して常に選択を迫られる時代といえる。また、社会的な情勢の変化に伴い、その傾向は加速度的に進んでいくものと考えられる。従来の教育は、方法的社会化によって、意図的、計画的、組織的に行われてきたが、今こそ学校教育の見直しを図ることが喫緊の課題である。

令和2年度は、約10年に一度の学習指導要領改訂に係る完全実施を迎えるが、明治時代の学制、戦後の民主化教育に続く大きな教育改革の節目と位置付けて、大局を俯瞰し、持続可能な教育の在り方を考えていくことが問われている。平成31(令和元)年度は、その準備期間の1年として、各校で教育課程の編成を検討してきた。キーワードとして、「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」「教科等横断的な学習」などが挙げられる。教育委員会の研究指定校研究テーマや校長会の研修内容も「教育課程～カリキュラム・マネジメント」が中心である。校長からは「授業時数確保のために従来の教育活動を見直し、行事の精選をしていく」という言葉が多く聞かれ、地域行事の縮小や「特別活動」の割愛といった近視眼的ともいえる意見も多い。「教科」の学びに偏りがちな風潮の中で、「地域」「福祉」「平和」「人権」「環境」等を切り口として、「総合的な学習の時間」や「特別活動」を通して、探究的、自治的な学びの創造をしていくことの重要性を主張する声は残念ながら少数である。

一方で、広島市においては、平成20年度より教育特区として実施されてきた「ひろしま型カリキュラム」の言語・数理運用科（総合的な学習の時間の35時間分を充てる）は一定の役割を終え、「総合的な学習の時間」の再構築を図る必要性が生じている。カリキュラム・マネジメントとは、大きくとらえると「時数確保のための時間割や年間の行事予定の見直し」等のハードの側面と「学習の内容の編成や授業づくり」等のソフトの側面がある。児童に身につけさせるべき資質能力の獲得に結び付けるために、それぞれ別々で語られることなく、両輪として機能しなければならないと考える。

そこで、広瀬小学校では、開かれた教育課程の実現のために、学校が地域の拠点となって学区にある人材や教育資源を生かすことで、学校の機能を高め児童の主体的な態度、とりわけ「自己調整力」を育むことを目指すこととした。「自己調整力」とは、自ら学習のめあてや見通しを主体的に考えて自己決定したり、自らの学習をメタ化して自己評価できる能力であるが、本校では、特に、「特別活動」と「総合的な学習の時間」とを関連付け、地域・社会に関心を持ち、学校生活の課題解決・改善に役立つ能力、態度等を養うことを目指した。

1 目標を明確に設定するための実態把握

（1）児童の実態（自尊感情の育成、社会参加を目指す根拠）

筆者が一昨年転勤してきて最初に感じた広瀬小学校の印象は、どの学年の児童も進んで挨拶ができたり、学校朝会でも静かに話を聞くことができたりと学校全体がとても穏やかで安定しているということであった。しかし、日を追うごとに印象は変わり、一人ひとりの個性を感じにくい画一的な側面が目につくようになってきた。また、児童間のトラブルは決して多くはないが、自分たちで解決したり、誰かが間に入って仲裁したりする様子はあまり見られず、教師がバランスをとる場面が多くみられた。間に入らないと収拾がつかないからなのか、早めに教師が入りすぎてしまうのかは定かではない。授業においても同様で、驚くほど落ち着いた学習態度で、板書をノートに写すときは鉛筆を走らせる音だけが聞こえるほど全

員が集中する。一方で、発表は単発的で、反応も「いいです」か「わかりました」で終わってしまうことが多い。

「主体的」で「対話的」で「深い」学びの実践を理念として掲げること

令和元年 広瀬小学校 ふれあいアンケート集計表（6月実施）

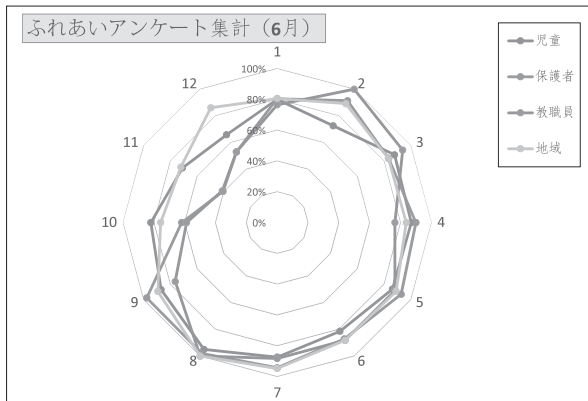
3, 4を選んだ割合

| | 番号 | 質 問 項 目 | 児 童 | 保護者 | 教職員 | 地 域 |
|------|----|------------------|-----|-----|------|------|
| 自尊感情 | 1 | 自分のよいところを自覚している | 80% | 80% | 76% | 81% |
| | 2 | 周りから認められている | 73% | 91% | 100% | 89% |
| | 3 | 努力すればたいていのことはできる | 88% | 84% | 94% | 83% |
| 思いやり | 4 | 人の気持ちを考えている | 87% | 90% | 76% | 84% |
| | 5 | 人に親切にしている | 86% | 93% | 88% | 89% |
| | 6 | 人が困っていると進んで助ける | 81% | 87% | 88% | 88% |
| 規範意識 | 7 | 学校の規則を守っている | 87% | 94% | 88% | 95% |
| | 8 | 公共物や動物を傷つけない | 95% | 98% | 100% | 100% |
| | 9 | いじめをしていない | 87% | 98% | 76% | 89% |
| 社会参加 | 10 | 地域のことをもっと知りたい | 82% | 62% | 59% | 76% |
| | 11 | 地域のために何か行動をしている | 71% | 41% | 41% | 72% |
| | 12 | 地域の行事に進んで参加している | 66% | 53% | 53% | 86% |

3－どちらかと言えばそう思う 4－そう思う (325人) (313人) (17人) (38人)

にはとてもやりがいを感じるものの、そこに至る道は険しいという印象であった。

令和元年6月に、児童、教師、保護者、そして地域を対象として、同じ項目でのアンケートを実施した。大きくは、「自尊感情」「やさしさ」「規範意識」「社会参加」という4項目でそれぞれ3つずつの設問に分かれており、この結果は、後に展開していく「広瀬型コミュニティスクール」の目標設定の際に参考とした。



その結果、おおむね4者の見方はほぼ同じ結果となったが、「自尊感情」のある項目だけ、児童と大人の見解が大きくかけ離れたものがあつた。それは、「②自分は（子どもは）周りから認められていると思う」という項目で、大人（とりわけ教師）の肯定的評価は100%に近いが、児童は80%にとどまった。「①自分にはよいところがある」という項目は、4者と

も95%で見方は同じにもかかわらずである。つまり、「自分にはよいところはあるが、周りの大人から（子ども同士も）認められていない」ということが浮き彫りとなった。そこで、教師の評価や励ましは、子どもの心に届いていなかったことを教職員集団で確認し、子ども自身の承認欲求と教職員の働きかけの乖離を埋めるべく、しっかり寄り添うことを共有した。いわゆる、「いい子」を演じている子どもが多く、「自分らしさ」に目を向けてほしいという叫びに応える実践を問い直す機会となった。また、「やさしさ」「規範意識」の項目は、4者とも高いが、「社会参加」の低さは顕著で、「社会に開かれた教育課程」の編成の必要性にも迫られることとなった。

（2）「学校あつての地域」と「地域あつての学校」を結ぶために立ちはだかる課題

広瀬小学校は、閑静な住宅地である広瀬（広瀬町、寺町、西十日市町）の中区とマンション等の建設が進む中広（中広町1丁目2丁目）の西区にまたがった地域が学区である。児童数も約半々で、保護者や地域も学校に対して大変協力的である。「広瀬」は、毛利輝元の広島築城当時、広島湾にあった五箇荘の一つで、江戸時代は広島城の西に位置する寺町周辺は大変賑わい、伝統的に郷土意識は高い。一方、中広は、湿地帯で葦が生い茂っていた時代が近代に入ると一変し、鉄工所や材木店が多い工業地帯となった。

このように、中区の「広瀬」と西区の「中広」は町の成り立ちにも大きな違いがあり、後に線引きされた行政区のねじれも影響し、地域としての一体感が得にくい歴史が続いた。社協も民児協も町内会も別組織で、学校主催の地域行事と言えば、広瀬側の方との交流が主であった。また、卒業後は西区の中広中学校へ行くこともあり、地域の中で育つ子

どもたちにとって、こうした地域性からくる影響は少なからず見られた。

このような課題は、他の小学校区でも実態は違えども抱えており、平成30年度広島市教育委員会事務点検・評価報告書Ⅱ-1-(5)カ 開かれた学校づくり (P.92) に次のように明記されている。

「地域でどのような子どもたちを育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを地域住民・保護者と共有し、地域と一体となって子どもたちを育むため、国が推奨するコミュニティスクール（学校運営協議会）の導入について検討する必要がある。」

広島県では、府中市などの先進的な実践がみられるが、広島市にはこれまで組織として立ち上がってはいない。そこで、何とか小学校を拠点として地域を結び付けたいと考える地域の方々の力を借りながら、「広瀬型コミュニティスクール」として、学校と地域がともに児童を育てていく体制づくりに着手することとした。

2 教職員の意識改革に向けた体制づくり（令和2年度の動き）

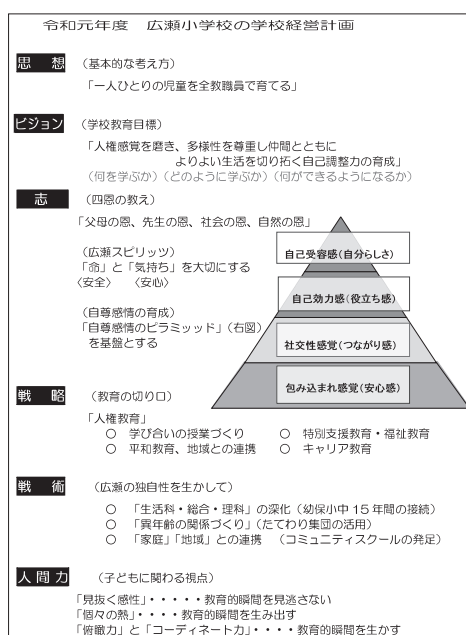
（1）「一人一人の児童を全教職員で育てる」

児童や地域の実態を踏まえ、広瀬小学校の学校教育目標を次のように変えた。

「人権感覚を磨き、多様性を尊重した学び合
いの中で『自己調整力』を育成する」

「滅公奉私」に陥りがちな社会の中で「公共的価値」を学校現場で培っていく上で先述した「地域」「福祉」「平和」「人権」「環境」をキーワードにした学びの創造が問われている。

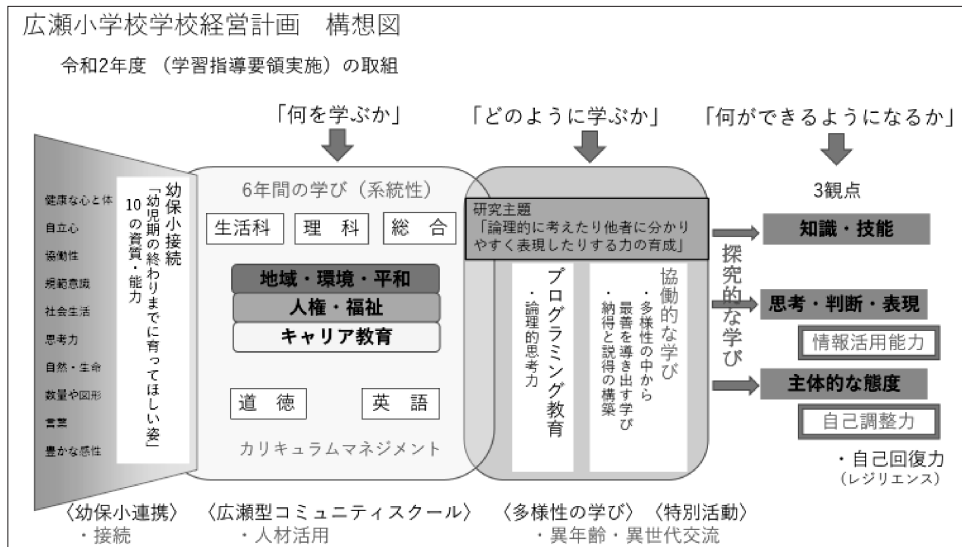
個の学習だけではなく、集団としての学習を通して非認知スキルを醸成していくのであるが、その中でも『自己調整力』は質の高い学び合いの中で育まれ、一人ひとりの児童がよりよい生活を切り拓く原動力になると考える。そのためには、「教職員集団そのものが質の高い学び合いを形成し、全教職員で一人ひとりの児童の『自己調整力』を育成していく」ことを土台に置くことを確認した。



（2）新学習指導要領の完全実施を機に

中教審答申で強調された「何を」「どのように」「何ができるようになるか」に沿って教職員全員で整理し、カリキュラムマネジメントを構想していくことにした。

まず教育課程の編成（「何を」）については、前述したように「総合的な学習の時間」の



見直しにあたり、「地域・環境・平和」「福祉・人権」「キャリア教育」の3本柱で系統性を示し、「社会に開かれた教育課程」をキーワードとして、地域の教材や人材を生かしていくことを確認し合った。教科内容や配列そして時数確保等の「顕在的カリキュラム」に力点が置かれがちである。「横断的」な学びや児童間の関係性を通した学びなど「潜在的カリキュラム」にこそ、多様性の中からよりよい選択をしていく学びが重要であることを共有する必要がある。

次に、「どのように」に関しては、異年齢そして異世代の関りを通して、多様性を尊重し、よりよいねうちを見出そうとする学びをつくり出すことを重視した。授業における協働的、探究的な学びづくりを目指すとともに、地域の方との学びが「意味ある他者」の存在として、教育課程の中に組み込まれることを模索した。さらに、単なる単元の配列の変更ではなく、「特別活動」を核にしながら、「よりよい社会を形成していく主体」として、学校の中だけではなく、地域を含めた「社会」に目を向けることでもある。

最後に、「何ができるようになるか」という観点では、画一的な学習成果を求めるのではなく、個々が自己調整力を身につけ、多様な生き方を選択できるために、「ラベリング理論」に陥ることない児童の見方を共有した。

以上のように、新学習指導要領の完全実施により「社会に開かれた教育課程」を見直すことは、日常的な指導のあり方を問い合う大きなチャンスにすることができたのである。

（3）ミドルリーダーによる教育課程の見直し

総合的な学習の時間の見直しを、校務分掌上の担当者ではなく、広島市教育センター主催講座「中堅職員研修」に参加しているミドルリーダーに預けた。担当者は、時間割編成などのハード面の調整に時間を追われており、ミドルリーダーは、「今、学校や自分に望

まれること」を見出そうとしていたからである。

研修前には、何度も児童課題、地域実態について話し合い、次の通り整理した。

| 項目 | 内容 |
|--|---|
| 対象 | 中堅職員をリーダーとした地域資源活用を柱とした教育課程の編成チーム |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none">令和2年度新学習指導要領の完全実施に向けた教育課程の再編成が、児童や地域の実態に即したものになるよう教職員で熟議を重ねる必要がある。校務分掌とは別にプロジェクトチームを組織し、その中心に中堅職員をあて、ミドルリーダーの育成につなげる。生活科および総合的な学習の時間の内容を見直しに焦点をあて、従来の取り組みや活動を土台とし3つのテーマ（地域・平和、福祉・人権等）に沿って系統だった単元の配列（カリキュラムマネジメント）を行う。児童と地域のつながりを考えとともに、地域とのつながり、教職員同士のつながりも深める必要がある。 |
| 改善策 (実施内容、 実施期間、 実施プロセス、 実施スケジュール) | <ol style="list-style-type: none">1. 学校教育目標を元にし、児童につけさせたい力「自己調整力の育成」を全職員で共有する。2. 低中高の3ブロックで協議する。(2回+α)<ul style="list-style-type: none">○全員参加の役割分担(枠にはまらない役割の設定)…1回目 12月下旬○従来の内容の取捨選択や大まかな年間指導計画…2回目 それぞれのブロックで実施○重点的単元の指導案検討…3回目 1月下旬3. チームワークのメカニズムを生かした取り組みを行う<ul style="list-style-type: none">○モニタリング、フィードバック、支援を生かし、相互調整を行う○経験豊富な先輩教員に、事前に相談をして理解を得ておく4. チームリーダーが参加予定の教育センター主催の中堅教員の研修会で実践報告会に活用する。 |



| 学 年 | 3 年 (70h) | 4 年 (70h) | 5 年 (70h) | 6 年 (70h) | | |
|--|--|--|---|--|---|--|
| テ ー マ | 人権感覚を磨き、多様性を尊重し、仲間とともによりよい生活を切り拓いていく「自己調整力」の育成 | | | | | |
| 探 究 課 題 | スローガン | 「たくさんの人と 交流しよう！」 ～地域の方と | 「身近な人の願いや 思いを知ろう！」 ～外へ目をむけよう | 「できることから 始めよう！」 ～地域とともにつくる環境 | 「踏み出そう！ 夢への第一歩」 ～未来の広島 広瀬から | |
| | 地域・平和 | ・敬老会 ・ふれあい給食 ・花いっぱい町づくり (地域の方とともに) | ・慰霊碑、門柱、被爆樹、 本川小資料館 ・安全マップ ・ふれあい給食 ・菊づくり（慰霊祭の献 花で使う白菊） | ・似島平和学習（野外活 動） | ・ピースサミット作文 ・平和記念資料館見学 ・（地域の歴史・広島に 歴史を知ろう）社会 | |
| | 福祉・人権 | ・点字体験（アイマスク 体験含む） ・盲導犬との交流 | ・車いす体験、 ・（中学校区ふれあい交 流会）音楽 | ・国際理解学習（修道大 学インターナショナル ハウス） | ・障害者（知的）理解学 習（はぐくみの里） ・平和公園インタビュー （外国人へ） ・多文化共生（修道大学イン ターナショナルハウス） | |
| | キ ャ リ ア | ・工場見学 ・4年生の学校生活を知 る | ・広島男子駅伝応援（幟 旗作成） ・二分の一成入式 | ・農業体験（稲作、餅つ き体験） | ・修学旅行でのインタ ビュー ・立志式 | |
| | 環 境 ・ そ の 他 | ・ダイコン栽培 ・町探検 ・パソコン学習・ローマ 字学習 | ・水道教室 ・環境学習（天満川に住 む生き物） | ・ひろしま学びの時間 (10h) 「緑のカーテン」 ・環境学習（身の周りの 樹木とくらし） ・グリーンアドベンチャー | ・ひろしま学びの時間 (10h) 「わたしたちが考える 広島市の未来」 | |
| | 協力団体・ 協 力 者 | 地域の方 広瀬型コミュニティース クール園芸部 | 広瀬型コミュニティース クール園芸部 環境保健協会 菊づくりの専門家 | 環境保健協会 農家の方、JAの方 | はぐくみの里 修道大学インターナシヨ ナルハウス | |
| 知 識 及 び 技 能 | ○町づくりや地域活性化 のために取り組んでいる 人々や組織について 知る。 ○身体の不自由な人につ いて理解し、その暮ら しを支援する仕組みや 人々について知る。 | | ○戦後、地域の伝統や文 化とその継承に力を注 ぐ人々について知り、 調べる。 ○身体の不自由な人につ いて理解し、その暮ら しを支援する仕組みや 人々について知る。 ○防災のための安全な町 づくりとその取組につ いて理解する。 | | ○自然環境と米作りへの 影響について調べる。 ○知的障害者との交流を 通して、その暮らしを 支援する仕組みや人々 について知る。 ○似島の平和学習を通し て、その当時の出来事 を知り、平和の大切さ について理解する。 | ○実社会で働く人々と触 れ合い、自己の将来に ついて理解する。 ○外国の人々と触れ合 い、他国とのつながり について理解する。 ○平和学習を通して、こ れまでの歩みや平和へ の思いを知る。 |
| | 情報を比較・分類するなど、探究の過程に応じ た技能を身に付けている。 | | 情報を比較・分類・関連付けるなど、探究の過 程に応じた技能を身に付けている。 | | | |
| 思 考 力・ 判 断 力・ 表 現 力 等 | 課題の設定 | 自分の関心から地域についての課題を設定し、 解決方法を考えて追究している。 | | 地域の人々等の思いをふまえて課題を設定し、解決 方法や手順を考え、見直しを持って追究している。 | | |
| | 情報の収集 | 目的に応じた対象を決め、自分たちの身近など ところから情報を集めている。 | | 目的に応じて手段を選択し、情報を収集したり、 必要な情報を選んだりしている。 | | |
| | 整理・分析 | 問題状況における事実や関係を、事象を比較し たり分類したり、数量などで客観的に比較したり して、特徴を見付けている。 | | 視点を明確にして問題状況における事実や関係と、整 理した情報を関連付けたり、多面的に考察したりして理 解し、多様な情報の中にある特徴を見付けている。 | | |
| | まとめ表現 | 相手に応じてわかりやすくまとめ、表現している。 | | 相手や目的、意図に応じ、工夫してまとめ、表 現している。 | | |
| | 振り返り | 学習したことをふり振り返り、生活に生かそうとし ている。 | | 学習の仕方をふり振り返り、学習や生活に生かそう としている。 | | |
| 学 び に 向 か う 力・ 人 間 性 等 | 主 体 性 | 課題の解決に向け、目的意識をもって意欲的に 取り組んでいる。 | | 課題意識をもって、自分なりの方法を工夫しな がら探究活動に取り組んでいる。 | | |
| | 協 働 性 | 課題解決に向けて、身近な人と力を合わせて探 究活動に取り組んでいる。 | | 課題解決に向けて、他者と協働して探究活動に 取り組み、その大切さに気付いている。 | | |
| | 自 己 理 解 | 自分のよさや自分にできることに気付いている。 | | 探究活動を通して、自分の生活を見直し、自分 の特徴を理解しようとしている。 | | |
| | 他 者 理 解 | 自分と異なる意見や考えがあることに気付き、 相手の立場を理解する。 | | 異なる意見や他者の考えを受け入れ尊重しなが ら、探究活動に取り組んでいる。 | | |
| | 社会参画 | 自分と地域とのつながりに気付き、地域の活動 に参加しようとしている。 | | 探究活動を通して、自分と実生活・実社会の問題 の解決に取り組もうとする。 | | |

3 「特別活動」と「総合的な学習の時間」をつなぐ実践 ～かかわりの中から磨いていく「自己調整力」の育成～

大まかな枠組みはつくられたが、いざ取組を始めると様々な想定外の出来事が生じた。

地域の方々の願いや児童の反応を受けながら、より発展的な取組にすることができた事例を紹介する。

(1)「花いっぱい 町づくり（ふれあい花壇づくり）」

学校行事の内容として、地域住民参加の下で従来から取り組まれていた「特別活動」の勤労生産・奉仕的行事である。本活動が、昨年度までと大きく違う点は、従来の広瀬地区のみならず、中広地区から多数参加があった点である。「広瀬型コミュニティスクール」発足の機運の高まりと運営の鍵を握るコーディネーターの働きかけが大きかった。



▶日時：2019年7月2日 火曜日 5校時

▶場所：広瀬小花壇（外回り北側、北西角）

▶参加：地域の方（各町内）計20名

▶作業：夏の花を中心とした花壇づくり

▶目的、内容：理科教育の一環と地域の方との交流活動として、毎年3年生がこの時期に行ってきた。また、学区全体の地域の方の参加をコーディネーターの方に依頼した。

(2)「学校内の花壇の雑草でも抜くか」

活動後、参加された方々を校長室に招き、活動の振り返りを行った。

「子どもはかわいいのう」「元気をもらった」
「あっという間に終わった」「物足りん」と様々。
「次も何かしたいのう」という声から、「じゃあ今度の土曜日、朝6時から雑草抜きするで」と思わぬ展開になっていった。

後日、中学生を含め7名が参加し、雑草を抜いた花壇を見て、ある地域の方から「ここも子どもらと何か植えたいのう」の声が挙がった。実は、これもコーディネーターの方と青写真を描いていた展開で、夏休み明けに3年生とミニひまわりを植えることとなった。



(3)「地域の方とミニひまわりを育て、敬老会でプレゼントしよう」

▶日時：2019年8月30日 金曜日 2校時

▶場所：広瀬小 南校舎東側花壇、学年園

▶参加：広瀬小 学校運営協議会のメンバー6名
＋町内会5人

▶作業：花壇づくり（ミニひまわりを植える）

▶目的：内容：広瀬スピリッツである「命と気持ちを大切に作る」活動として、ミニひまわりの育て方を地域の方に教えてもらい、丁寧にお世話をする。また、育てたミニひまわりを敬老会でお年寄りにプレゼントする。



（４）「なんでやるん？」に対する見事な切り返し

1回目の花壇づくりは、教師の指示で進行したが、今回は、事前に「学級会」で話し合い、司会、はじめの言葉、終わりの言葉の役割を決め、当日を迎えた。始まるや否や、Aくんの「なんでやるん？」発言が飛び出した。いつものAくんの生活態度を考えると、全くやる気のない反発的な反応である。そこへ、地域のBさんが、前に出てきて話し始めた。
「ひまわりはね、夏の終わりに蒔いても、温度が高ければ大丈夫なんだよ」

Aくんの「なんで」は、「どうして夏に咲く花を今頃蒔くの？」と解釈されたいらしい。

すかさず、地域のCさん（社会福祉協議会会長）も語り始めた。

「ミニひまわりを育てて、地域の敬老会でお年寄りにプレゼントできたらいいね」

A君を含め、子どもたちはうなずいた。進行役の児童が、「お年寄りの方に喜んでもらうために、みなでお世話しましょう」と言って、種まき作業が始まった。

「なんでやるん？」のやる気のない発言が、地域の方の言葉かけと「自分たちの力で」というなかまの言葉で、集団の空気が一変した。もし、教師が進行していたら、大多数の無言で受け身の児童と少数の不満を持つ児童を前に「地域の人の前で、いらんことを言いんさんな」と制止が入り、受け身の活動にとどまっていたかもしれない。

別の見方をすると、Aくんの発言こそ、主体的な活動に結び付くターニングポイントであったと言えるかもしれない。物言わぬほかの児童の中にも同じ思いをもっていた可能性はある。子どもの声を受け止めようとして関わってくれた地域の方の存在となかまとともにつくり出そうとする自治的な動きを醸成する特別活動の連動が「自己調整力」育成の一助となったといえる。後に開かれる学校運営協議会（コミュニティスクール）の会合の度に、このエピソードは語り草となっている。

4 まとめと今後の課題

学習指導要領の改訂に係る「特別活動に求められるもの」には、社会参画意識の低さが課題となる中で、自治能力を育むことがこれまで以上に求められていることが強調されている。本稿で取り上げた実践は、児童の中に内在する受け身で消極的な発達課題に正対し、ミドルリーダーを中心に全教職員がベクトルを揃えて緻密なカリキュラム・マネジメントを構想する中で生まれた、自治の萌芽を「自己調整力」に連結していく貴重な取組である。

時間も手間暇もかかるが、児童のゴールの姿「自己調整力の育成」を共有し、教職員（とりわけ担任）が一人ひとりの見通しや連携づくりを丁寧に紡ぎ合いながらかけがえのない「子どもの一歩」、とりわけ困り感の強いA君の「主体的な一歩」を自治的に生み出している。たった一つの取組ではあるが、地域住民ならではの地力を生かしてもらいながら児童の変容を実感した教師が、大切にすべき指導を教育全般で生かしていくきっかけとなった。

課題として挙げられることは、「特別活動」の取組は教師の経験的、感覚的なものに依拠しており、学年間、教師間では意識の差が大きい点である。特に、若手教師には、その教育効果やイメージが湧きにくいであろう。今回も偶然、機能したともいえる。国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官の志々田は「社会に開かれた教育課程の実現に向けた特別活動と総合的な学習の時間のあり方」の中で、以下のように述べている。「留意しなければならないのは、特別活動と総合学習は類似する点が多いものの、決して同様の活動ではないという点である。総合学習が教科横断的な『知の総合化』を目指すものであるのに対し、特別活動はよりよい集団活動によって学校生活の課題解決・改善に役立つ能力、態度等を養うことをねらいとしている。こうした違いをふまえつつ、両者の特質を活かした関わり方についても検討をおこなう必要がある。」「教育課程の計画から実施、評価に至るまでのプロセスを学校内だけでおこなう閉じた運営から、地域（社会・コミュニティ）と共有・連携しながら創造する開かれた運営へと転換すべきとの理念が込められている。」と述べている。

将来の教育を考える大きな節目と言える「教育改革」の年であったが、一方で、「働き方改革」が法律の上でも進められている。教職員にアクセルとブレーキを同時に踏ませるような1年ともいえる。この状況を打開するために、逆行しているように思えるが、最も重要なことは「教職員の意識改革」であった。ミドルリーダーの俯瞰する力、教職員を結び付け学校を牽引する力は、管理職のもつ指導性とは別の大きな力となった。

これまでを振り返ると、1992年の生活科や2002年の総合的な学習の時間、学校五日制の実施、そして2003年から広島市で実施されている2学期制への移行などを通して、その度に教育課程を見直し、学校の独自性を発揮してきた記憶がある。

ひろしま型カリキュラムの「言語・数理運用科」も指導案や資料が用意されたものを与えられることに慣れた中堅教師、若手教師に、授業を創造的に取り組む意味を伝授しなければならないと感じた。そして、令和2年度は、各校のカリキュラム・マネジメントの真価が問われている。

参考文献

- ・「社会に開かれた教育課程の実現に向けた特別活動と総合的な学習の時間のあり方」志々田まなみ、熊谷愼之輔 広島経済大学研究論集第39巻1・2号 2016年9月
- ・広島市立広瀬小学校『創立百周年記念誌 廣瀬』、広島市立広瀬小学校PTA、2009年
- ・広島市立広瀬小学校『創立八十周年記念誌 廣瀬』、広島市立広瀬小学校PTA、1988年
- ・広島市都市整備局都市計画課『ひろしまの復興と現在の都市計画』
- ・広島市『広島新史 行政編』広島市、1983年